

奈良県指定文化財指定の概要

2 額安寺宝篋印塔 1基 (建造物)

所在地	大和郡山市額田部寺町36番地の1
所有者	額安寺
構造形式	石造宝篋印塔 文應元年十月十五日の刻銘がある
時代	鎌倉時代(文應元年/1260)

額安寺は、大和郡山市南部の大和川(初瀬川)と佐保川が合流する北岸近くに所在する寺院である。創立については、天平頃に描かれたとされる「額田寺伽藍並条里図」が伝えられ、周辺から飛鳥時代や奈良時代の瓦が出土し、この頃には伽藍が整っていたようである。

宝篋印塔は境内の南西寄りに建つ。花崗岩製で地上高2.77m、下から基礎、基礎上段形、塔身、笠下段形、隅飾と笠上段形下部、露盤と笠上段形上部、相輪の順序で7段の部材が積み上げられている。基礎の側面には各面2間ずつの格狭間が彫られ、北面の格狭間内には『文應元年/十月十五日/願主永弘』『大工大蔵/安清』と刻銘があり、隅飾や格狭間の様式からもこの頃の造立と考えられる。もとは境内の南東にある明星池の中島に建っていたが、転倒したため昭和48年に組み立てられ、翌年の調査で刻銘が確認され、昭和54年に大和郡山市の指定文化財となった。その後も倒壊が危惧されたため、平成20年度に大和郡山市の補助事業として現在地に移築修理された。この時に欠損部分が修理されたが、塔全体の部材は材質や風蝕の状態からみて、概ね当初のまま完備していると考えられる。

額安寺宝篋印塔は造立がほぼ同時期の興山往生院の宝篋印塔(重文、正元元年(1259))と同様、古式な手法がみられるが、細部には装飾性が加えられ、造りも丁寧で保存状態も良好である。

現在、最古の年紀をもつ興山往生院宝篋印塔に次ぐ年紀をもち、造立石工を具体的に知ることのできる貴重な遺品である。

